

Title	共生実現への持続的な意志
Author(s)	脇阪, 紀行
Citation	未来共生学. 2018, 5, p. 3-5
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/68204">https://doi.org/10.18910/68204</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ジャーナル『未来共生学』の第5号をお届けします。創刊以来、5年という歳月がたちました。人でいうならば、よちよち歩きをとうに脱して、自分の言葉で自らの考えをいろいろ話し始める時でしょうか。

大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラム（以下、未来共生プログラム）の機関誌である本ジャーナルは、未来共生学構築に向けた研鑽の場として、地域や日本、そして世界の「非共生」の現実に目を向ける一方で、それに立ち向かうような「共生」の取り組みに関心を寄せてきました。本号では、二つの特集を組んでいます。

## 共生実現への 持続的な意志

一つ目の特集「排外主義の台頭と多文化共生の未来」は、21世紀に入って二〇年近くたった現在、世界で起きている移民・難民排斥の背景を探り、多文化共生の行方を考えようとするものです。鳥の目で地球を俯瞰すると、紛争や貧困を背景に、多くの移民・難民が生まれ、排外主義が欧米各国の政治に大きな影響を与えています。日本でも、政治やメディア、ネット空間において、排他的傾向が目立ちます。本特集では、インドネシアやアフリカを含む国内外の排外主義の現状と展望を論じ、専門家による座談会を行いました。

これに対して二つ目の特集「未来共生プラクティカルワークの現場から」は、虫の目で足元の現場を見つめ直そうとするものです。前号に続く企画第2弾です。本プログラムの教員・履修生を受け入れていただいた現場を再訪して、行政や教育機関、NGOの方々から話をうかがい、共生の課題や意義を改めて考えました。特集では、組織や活動を引っ張る人々の姿が描かれていますが、それらは、本プログラムが目標に掲げる「未来共生イノベーター」像に多くの示唆を与えてくれるものでした。

「未来共生イノベーター」とは何か。今から6年前の創設時、本プログラムは、それを「多様で異なる背景や属性を有する人々が互いを高めあい、共通の未来に向けた斬新な共生モデルを具体的に創案、実施できる知識・技能・態度・行動力を備えた実践家・研究者」だと表現しました。いわゆる象牙の塔に閉じこもるのではなく、国内外の現場に足を運び、経験を積み重ねて、より広い社会に貢献できる人材になってもらおうというものです。しかし、そんな人材の養成を一朝一夕にできるものではありません。

プログラムが頼りにしたのは、履修生がお世話になった現場の人々でした。若者たちを受け入れ、導いてくれる人々の姿の中に、「イノベーター」の片鱗を多く見出せたからです。

行政の仕組みに頼らずに認知症のお年寄りを世話する豊中市の集まりは、独自のケアの空間を生み出していました。優しさあふれる会話や遊びの輪の中に入ると、誰が世話をし、誰が世話をされるのかわからない。そんな魔法の空間を生み出したのは、お堅いエリートの頭ではなく、高齢者の皆さんの共生への思いでした。

外国ルーツの子どもたちに日本語教育を行う大阪市の教員たちは、尋ねたいこと、感じたことがあふれ出てくる子どもに母語での表現を許していました。生きた日本語を体得するために何が効果的なのか。履修生は、日本語オンリーという画一的な教育を乗り越える取り組みに関わることができました。

私たちが徒手空拳で、現場に駆けつけても、すぐに何かができるとは限りません。むしろ、目を凝らしても何も見えず、裏切られた思いをするのがおちでしょう。ケニアの国際協力の現場で暮らした履修生は、支援するNGOと支援される住民との間に横たわる信頼と不信、善意と狡猾さのはざ間で苦しみました。大阪市港区や豊中市南部では、子どもの不登校やLGBTといった、さまざまな課題解決にどう取り組んだらいいのか、悩まされました。

そこでは、人と人をつなぐ知恵が試されます。住民のネットワークづくりや居場所づくりに、行政のベテランや地域の皆さんは時に教え導くように、時に自ら面白がりながら、履修生や教員を上手に巻き込んでいただきました。長年の経験に裏打ちされた、その技量と熱意に驚嘆するしかありません。

論文や研究ノートには、そんな履修生を中心に原稿が寄せられました。アメリカや日本の教育現場での体験、街角でのダンス活動の実践、そして、女性に対する男性の暴力をなくす取り組み。統計的分析であれ、アクションリサーチであれ、方法論的考察であれ、どの原稿の背後にも、現場や実践活動から得た問いかけがあることを感じ取れるでしょう。エッセイには、論文では書ききれなかった現場での思いや感想がつつられています。

現場と研究との往還を重ねながら、自らの問題意識を考察にまとめてい

く。それは未来共生学構築に必須の態度であることは言うまでもありません。

寄稿した履修生は、査読者や編集者からの厳しい批判や校正の指摘を受けて、幾度も書き直しを求められました。多くの教員の協力を得ることによって、本ジャーナルは、文章表現の鍛錬の場としても一定の役割を果たしていると考えています。

全国64のリーディング大学院プログラムの一つとして、2012年度に創設された未来共生プログラムは学内の文理両分野にまたがる8研究科を対象に、これまでに一期生から五期生まで約70人の履修生を迎え入れました。一期生は5年の課程を終え、この3月、プログラムを巣立っていきます。

世界のどこで生きていようと、自身を打ちのめそうとする困難とうまく折り合いながら、共生社会を実現するために、利他心や連帯の芽を全力で育てていく。そのための、生涯にわたる持続的な意志が問われます。

未来共生学構築への取り組みはまだ続きます。引き続きのご支援、ご愛読をお願いいたします。

2018年3月

『未来共生学』編集委員会委員長  
未来共生プログラム特任教授

脇阪 紀行